



梨の栽培管理 成木樹の改造

先々代や先代が栽培管理していた梨園を引き継ぎ、後継者が新たな技術で栽培を始めたり、また、何らかの原因により、これまで栽培していた梨園を管理することが出来なくなったことから、面積を拡大したい人に継続して栽培してもらう事例が生まれています。

しかし、引き継いだり、引き受けた樹が新たに栽培を始めた人の技術や感性にそぐわず、栽培を進めて行く上での悩みとなっていることが見受けられます。

その一つとして、樹齢を重ねた樹での骨組みの枝が多くなる樹への対応があります。このような樹で骨組みの枝を整理して樹の改造を行ったところ、収量増につながったり、せん定に要する時間が削減されている事例があります。

大もとの骨組みの枝を主枝と言いますが、一樹当たりの主枝の本数は多くても4本までで、主枝が3本仕立てや、また、最近は一方向に連続的に作業ができる事から、省力につながる1本主枝や2本主枝も見られます。

次に、現場での事例を紹介します。写真1をご覧ください。この樹は本来3本主枝仕立てだった訳ですが、若い樹齢のころに分岐部の近くで枝を取り、その枝の整理が行われることも無くそのまま年月が経過したものと思われます。

この樹を見ますと、整理した大きな切り口が2カ所見られます（矢印）。整理する前はあたかも5本主枝の様相です。主枝が多くなると、果実を生らす枝が骨組みの枝の上を渡ることになります。骨組みの上を渡っている枝は、防除の時の薬液がかかり難いこともあります。生っている果実が病害虫の被害を受けたり、擦れて傷がつくなど、商品にならないものが発生することがあります。また、骨組みの枝に直接果実を生らすことほとんどありません。

このようなことから、骨組みの枝が多いと樹の広がりの割には収量が少ないと言うことになります。さらには、せん定期に枝の配置に頭を悩ますことが多くなり、せん定期作業が遅れることにもなります。写真2は主枝上で太くなった枝を整理し、果実を着ける枝の若返りを図っています。

結びに、大枝を整理した時は、切り口の切り粉を払い、その日のうちに保護材をたっぷり丁寧に塗布しておきたいものです。

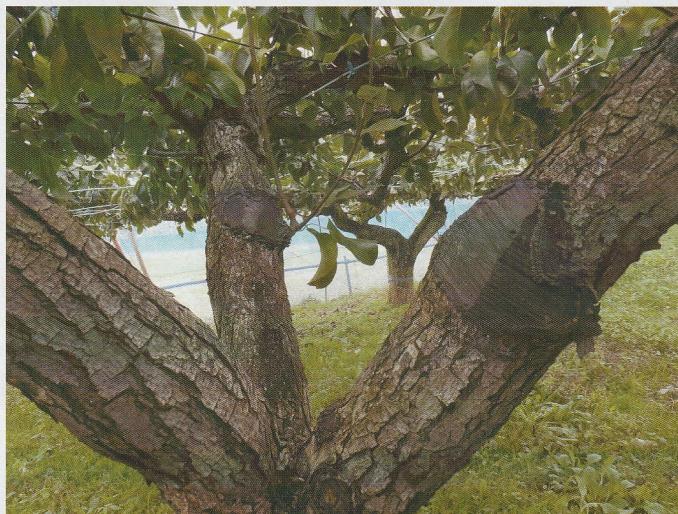


写真1 大枝を2本整理



写真2 枝の若返りを図る